

ディスカッション

「家庭連合の過去と現在と未来」

司会

では、続きまして、パネルディスカッションに移ってまいります。パネリストの皆様にご登壇いただきます。拍手でお迎えください。パネリストは、宗教学者の島田裕巳先生と家庭連合二世の小嶋希晶さん、新田剛さん、戸丸はるかさんです。コーディネーター兼パネリストとして、二世の会代表の小嶋希晶に進行をお願いしたいと思います。それでは、よろしく申し上げます。

小嶋

みなさん、こんにちは。主催者挨拶ができずすいません。この場をお借りしてさせていただきたいと思います。皆さんお越しくださってありがとうございます。そして、先程司会から案内がありました通り、今回は宗教学者の島田裕巳さんをお迎えしてディスカッションをする運びとなりました。本日はよろしく申し上げます。

先程のアンケートにありました通り、私たちが次のシンポジウムを行おうとしたときに、二世の会だけの小さな意見だけではなく、家庭連合信者全体がどのように感じてるのかを把握したいという思いで先程のアンケートを取りました。シンポジウムで発表するつもりなく簡素にとったんですけども、改めて私たちも集計しながら、現役信者の様々な思いを聞いて、とても心痛い内容もたくさんあったんですけども、何と云うか、現役信者が今被っている被害だったり辛い思いを一方的に発信したいという意図は全くなくて、先日、30日に報道がなされて、家庭連合の解散を具体的に審議していくと、10月12日に宗教審議会があるということもまた報道されました通り、そこにしっかり向き合っていこうと、私たちの現役信者の思いも訴えながら、教会を離れた方々のそういった被害にもしっかり目を向け、本当の解決ってどこにあるのか、解散なのか否かまで含めて、今回、先生をお迎えして、討論できたらなと思っています。

テーマとしては、解散請求についてが1つ、その次によく報道でなされている高額献金について、また、合同結婚式、私たちで言う祝福結婚、これが人権侵害だと言われてる話もありますので、この高額献金と祝福結婚についてのテーマ2つに絞って、少し議論できたらなと思っています。最後に、二世たちが願う家庭連合のあり方、願う教会の姿というのが、どういうものなのかというのを最後に議論して、締めていこうと思っています。

解散請求について

まず、1つ目のテーマとして解散請求。これが具体的に今、審議されてるという内容なんですけども、私たちの思いとしては、先ほどアンケートで発表した通り、辛く悲しいという思いが先立ってるんですが、島田先生はどういうご見解なのか、まず聞いてみたいと思います。

島田裕巳

ちょっと昨日ですね、気がついたというか、今までの認識とちょっと変えなきゃいけないかなと思ったんですけど、家庭連合さんとはですね、なんて言うんですかね、一応、私は新しい宗教の研究というのをしているので、かなり昔からこの教団をウォッチしてきたわけです。私は1953年生まれなので、大学時代に原理研究会という形で大学の中であって、その原理研究会が共産党系の民青とぶつかってるっていうそういう時代です。で、またね、家庭連合、統一教会の方が現実的には弱くて、民青にボコボコにされてるっていう現場を大学の時に見たことがある。それ以降、1990年代に当時は統一教会ですから、統一教会のことが問題になったときに、ちょうど私が新宗教について、いろいろ発言してるっていうことで注目もされ、関わりを持ったりもしたわけですけど、それから30年経って最初に思ったことは今更っていう感じもしたんですけど、ただ、今回の事態というのは、昨日思ったことはですね、家庭連合にとっては相当深刻な事態かなっていう風に思います。

文部科学省は、一応10月12日に宗教法人審議会に解散請求をするということを図ることが出てきたわけですね。その報道に接して私が一番思ったのは、日本の国、国家というものはですね、相当本気にこの解散という方向にいかうという方針を、かなり前の段階から貫いて、実はいたんだと。そういうふうに見ないとこれはいけないのではないかっていうことにちょっと気が付いたんですね。解散請求のことに關しては、去年の11月30日に、家庭連合側で弁護してる中山弁護士から呼ばれてですね。一度お会いしたいっていうことで、事務所に行ってお話をしたと。その時は中山さんがおっしゃっていたのは、去年(2022年)の年内にも解散請求があるのではないかっていう前提で、そのあと解散請求がなされた後に、裁判所でどういうふうになっていくか、地裁、高裁、最高裁でっていうんで、数カ月かかるであろうというようなことで。中山さんの立場からすると、解散請求には該当しない、その条件に当たらないってことをおっしゃってるようなんですけど、ただ振り返ってみるとですね、去年の10月の18日に岸田首相が、解散請求するためには刑事事件が関わってないと解散請求はできないというふうに国会で答弁をして、翌日、19日にそれをひっくり返して、民事訴訟ということで、不法行為というのが明らかになったらば、これで解散請求ができるっていうふうに手のひら返しのようなことをしたわけです。

ね。

この経緯っていうのは一体どうだったのかってこと、まあちょっと改めて調べてみると、その時に国会でその解散請求のことを首相が聞かれるっていう想定をしていなかった。まあ、国会の場合、あらかじめ質問を出しておいたりするんですけど、その中に入っていなかったんで、首相が慌ててメモかなんか見て答えてしまったと。ところが、自民党の他の議員からそんなことはない、民事の問題でも解散請求はできるんだってことを、なんか2人ぐらいの人から言われて意見を変えたってことなんですけど、この10月19日っていうものがやっぱり1つ大きな節目で、その後どういうことが行われていたかというところ、この解散請求を行う主体となる文科省、文化庁の宗務課というところがあります。宗務課というのは宗教法人を扱ってる部署でありますけど、そんなに大きなところじゃないんですね。元々、8人しか会員がいないところで、課長、その他一般の人がいて、その中に割りと私のように、宗教学を学んだ人が専門職員っていう形で関わって、1名ぐらいっていうような、本当に小規模で。宗教法人に関しては、あまり役所の方が信教の自由ってことがあるんで、介入しないっていうことなんですよね。だから、会員の数も、それほど多くはない。だから、全国にある宗教法人全体を管轄してはいるんだけど、監視するような、そういうところじゃないです。で、その宗教法人の宗務課っていうものが、首相の意向からまず24名に増員されています。8名から24名。で、11月1日の時点で、それが、さらに38人に、つまり、30人。この30人という中には、警察とか、他の役所の人たちが含まれていて、この30人という人が、その、11月1日の時点から今日まで、解散請求をするためのいろんなことを30人でやってきてる。

小嶋

その30人の具体的な、なんていうかどういう人たちが…？人を増やすっていうのは、どこからも連れてきて…

島田裕巳

警察庁と法務省と

小嶋

いろんな部署から増員してる…？

島田裕巳

そうです。ということを振り返った時に、この時点で国は本気でこれをやろうとしている。ちょっと経緯を見てると、そのあと7回質問権を行使するわけで、あまり捗々しい成果が得られなかったかのように報道されてる部分もあったと思うんですけど、実はそうで

はなくて、長い時間をかけていろいろな証拠を集めてですね、最後の段階では、質問権に対して適切に教団が対処しなかったってことで、過料を科すってというようなことも解散請求の判断をするための材料として提示するっていう、そこまで含めて考えてきたんじゃないか。具体的にどういうものを集めていたのかっていうことは、あまりよくわからないんですけど、その被害者、これどういう風に捉えるか難しいんだけど、被害に遭ったと思ってる人たちに、かなりヒアリングをしていて、そういうものも集めてると。で、かなり膨大な資料をこの30人の人たちがほぼ1年をかけて集めてきたわけですから、相当なものが集まってるはずですよ。それがいよいよ集まったということで、この段階になって解散請求に踏み切るっていうところに来てるとなると、これはですね、ちょっと簡単な、去年の時点で解散請求をするっていうのと、やっぱりこれだけの資料を集めて解散請求をするっていうのは、相当違うのではないかと。それだけ用意周到にやってきたことを司法が判断するわけですけど、司法の方もおそらくこの1年をかけてこの案件に関して研究をしてくると。ただ待ってるだけではなくて、あらかじめどうするかっていうことをやってきてるっていうことがあって、これは国の方ですね、もうあらゆる威信をかけて、これは単なる政権の威信じゃないです。岸田首相の威信を守るってことではなくて、国の威信を守るっていうところに踏み出してきてるのではないかと。だから、事態としては、教団側にとっては相当深刻なものとして受け取った方がいいのではないかっていうふうに、昨日、気が付いたんですよ。

小 鷗

単純に疑問があるんですけども、私たち普通の信者からすれば、こういう情報は、メディアからしかあまり来ないものなので、テレビ見ていてどういう思考回路かと言いますと、教団から離教した信者たちが被害を訴えているということで、質問権を7回行いましたと。この信者の言っている、元信者の言っている内容が、合ってるのか間違ってるのか、いろんな観点があるので調べてみましょうということになって調べた結果、請求に値するか値しないか調べなきゃいけないかった。1年間調べて、結局、請求するかしないかというのを決めると、12日に審議するっていうことで、私たちはそれしか情報がないっていうのもあって、それが筋道というか、普通の流れだと思うんですけど、今、先生がおっしゃった内容は、なんとというか結果ありきということですか？

島田裕巳

そうです。なぜ結果ありきなのかって理由もあるんですけど、ちょっと、それは、もうちょっと後に説明。

小 鷗

え、じゃ、教団があつてるか、教団の悪質性があるかないかというのを、真剣に探して

くれてたわけではなく、もう結果ありきでそこに向かって…？

島田裕巳

解散請求にあたる条件を整えるために動いてきたっていうふうに考えた方がいいと思います。家庭連合にとって、非常に不利なことは、この1年半の間に、味方になってくれる人がほとんど現れなかった。

小嶋

はい。

島田裕巳

メディア的にもほとんどのメディア、だからごく一部以外を除くとですね、これ(家庭連合)を擁護しようっていうような声がこなかった。例えば、あのオウム真理教の事件が起こった時には、法の適用、団体適用ってことが問題になったんですけど、それに対しては、オウムに批判的な人たちもこの破防法を適用するってことに関して反対っていうような声も上がったわけですね。ところが今回に関しては、そういう声がほとんど上がってない。特にこの宗教法人の問題を審議する宗教法人審議会というのが文化庁の中にできてるわけですね。この審議会のメンバーというのはどういう人かっていうと、宗教界の代表で、宗教会の中には既成宗教の人もいれば新宗教の人もいる。あるいは学者で宗教学者もいれば法学者もいるっていうそういう構成なんですね。そこが今まで7回にわたる質問権っていうのを全て認めてきて、なおかつ今度、12日の時点で解散請求をするってことに対して同意するってことは、日本の宗教界、日本の学会、そういうものがこぞってこの解散っていうことを認めたっていうふうに考えられるんじゃないですかね。

小嶋

言葉が出ないんですけど。こないだ顧問弁護士の福本弁護士が過料の違憲を訴えて会見したのが記憶に新しいと思うんですけども、この裁判だって、じゃあもう話にならないってことですか。この質問権自体が違法だったということで訴えてますけども、勝ち目もないと…？

島田裕巳

結局他の宗教団体、要するに宗教法人審議会の審議過程が全く明らかになってないので、わかんないんですよ。そこで反対意見があったのか、どういう議論がなされたのか分からない。これは後になったら分かるのかもしれないんですが、現時点では分からないんですから。ただ、表だった形で反対とかそういうことが出ていないので、要するに文科省の言ってる考え方というものを審議会がおそらく概ねのところは認めたんだと思うんです。て

いうことは、宗教団体からすると、まあ、家庭連合ってというのは色々問題がある宗教だ。自分たちにそういう被害というものが、解散請求をしてもまあ及ぶことはないであろう。そういう判断を宗教界が下してなければ、審査会の段階で異議が出てくるはずですね。異議が出てきたのかもしれない。ただ、それが明らかになってないんで、今のところなんとも言えない。学者の人たちがどういう意見を言ったのかもよくわからない。だけど、解散請求までもし行ったら、これは学問の世界も宗教の世界も両方とも、これを認めたっていうことで、その重みってというのは結構あるんじゃないかなと。僕は去年の段階では、宗教法人審議会でも本当にそういう請求が通るのかどうかね、やっぱ異議が出てくるのではないかというふうにも考えていたんですけど、どうもそうではないっていうことになってくると、事態としてはかなりまあ大きなことになってるんじゃないでしょうか。

小嶋

深刻ですね。

島田裕巳

だから、それに対して司法がどう判断するか。司法というものも、やっぱり世の中の動きっていうものに対して、特にこれはね、世界的な流れっていうものをちょっと見なきゃいけないと思うんです。日本では憲法によって信教の自由が保証されているとともに、セクトとして政教分離の原則っていうのが確立されているわけです。私が見たところ、世界の中で、政教分離っていうことに関して、非常に厳格な国が3つある。

小嶋

うん。

島田裕巳

1つはフランスで、皆さんご存じのように、今、フランスではイスラム教徒の女性のスカーフ問題ってことがずっと問題になっていて、公共空間の中でスカーフをするっていうことに対して、それを禁じるっていう方向を打ち出しているわけですね。これは元々はですね、ライシテというふうに言って、フランス流の政教分離っていうのは、カトリック教会の力があまりにも強かったんで、それを抑えるためにフランス革命以降そういうものが確立されてきた。ところが、カトリックは、まあ今はそんなに問題にはならないけれど、イスラム教徒の移民というのが増えて、フランスの10パーセントぐらいの人たちが移民で占めるようになり、その人たちの多くがイスラム教徒であるっていうことでこういう問題が起こってきた。フランスで今回でも色々カルト規制法っていうことが問題になりましたけど、そういう、まあフランスではカルトじゃなくてセクトっていう。

小嶋

反セクト法

島田裕巳

そう。そういうようなものができるってことは、やっぱりそのフランスの中に宗教を規制するっていうことに対する強い考え方っていうのがあるということの意味している。もう1つはですね、トルコなんです。トルコというとイスラムの教の国っていうふうに使われるかもしれないんですけど、もともとオスマン帝国というイスラム教を中心とした帝国があって、そこが倒されてトルコ共和国というのが生まれ、トルコ共和国というのは、建国の時に明確に政教分離っていうことを謳って、フランスからライシテっていう言葉を取り入れてライクリッキって言葉を作って、イスラム教っていうものがトルコの宗教にならないようにっていうことでやって、かなり厳格にそれをずっとやってきた。

それから日本です。日本の政教分離っていうのは戦後に占領下の中で、要するに戦前の体制というのを国家神道国家とし、神道が結びついたことが日本が軍国主義になった大きな要因であるっていうことで、この2つを分断するっていう、これはだから占領軍の政策なんですけれど、それを日本では取り入れて神道指令っていうのがすぐ出るんですけど、それで両者を分離させる。憲法の中にも政教分離というのが盛り込まれて、これが次第に日本の中で政教分離っていうものが強くなってくんですね。特に大きかったのは、靖国神社の国家護持の運動っていうのが起こって、これに対して、共産党その他左翼の勢力というのが大体反対をした。キリスト教会も反対するっていうことが。で、その時に大きな意味を持ったのが三重県の津っていうものの、津地鎮祭訴訟っていうのがあって、これは訴訟としては非常に有名な訴訟です。津市が体育館を作るときの地鎮祭の費用っていうのを、これ1万円にも満たないんですけど出してる。

小嶋

あー、聞いたことある。

島田裕巳

はい。これが政教分離ってことに違反すると言って、共産党の関口という議員さんが訴えた。まあ、最初はその一個人が訴えたに過ぎなかったんですが、ちょうど靖国神社の国家護持っていうことが進行していた段階だったので、そういう靖国神社の国家護持に反対するような人たちが、この津地鎮祭訴訟にみんな応援に来たわけですね。判決的には、最高裁では、これは別に習慣だから構わないっていう判決は出たんですけど、ただ他にもそういうような訴訟が相次いだことによって、自治体がそういう宗教行事に対してお金を出すことができなくなる。だって、訴訟を覚悟しなきゃいけないんでね。その後には内閣総

理大臣、首相の靖国参拝ってということが問題になった時に、これが公式参拝なのかどうかってということがその流れの中で問題にされるようになって、中曽根首相が公式参拝をしたら中国や周辺諸国から批判を浴びたっていうようなことですね、そこで靖国の首相参拝、公式参拝ってことが国際問題になる。てことで、**だんだんこの政教分離の原則というのが厳格に適用されるようになってきてる。**

小嶋

うーん…

島田裕巳

だから、**この方針っていうのは、日本の国家の方針**です。地方もその線に沿ってずっとやってきてる。やっぱりその司法も、政府、行政府の方もやっぱりそういう自分たちの力っていうものが欲しい部分もあるわけで、宗教に対して規制する力っていうものを持ちたいってことがどうしてもある。これがさっき言ったフランスとかトルコ、日本っていう特に政教分離がやかましく言われる国の中ではそういう傾向が強いですよね。こういうのはアメリカとか韓国にはないんです。もっと緩いんです。ゆるいですよ。だけど、この三国（フランス、トルコ、日本）に関して言うと相当きつい。で、そのきつさっていうのが日本の場合には**どんどんどんどん強化されて、それで今日に至ってるわけで、そういう流れの中から言うと、宗教に対する見る目の厳しさっていうのを行政も司法も持ってるんじゃないか。**司法の側としては、今回、もし解散請求がなされた時に、それが妥当なものっていう、法律的に妥当なものとして適用することができるっていう判断ができるんだったら、むしろ、そっちの方に行きたいっていう意思を持ってるんじゃないですか。

小嶋

うーん…

島田裕巳

だから、**今一番、世界の中で宗教が問題化してくるときに大きいのは、宗教と世俗の権力との対立**なんですよ。

小嶋

うん。その、例えば司法のその立場としては、さっきおっしゃった通り、チャンスがあるなら踏み込みたいっていう立場だとは思いますが、よく言われてる(ことですが)、**統一教会で(解散命令を)認めてしまえば、他の宗教も当てはまってしまうんじゃないか**ということもよく言われてると思うんですけど、**司法がそれなら今、既存である枠組みの中で、家庭連合は解散に値するという判決を出したいとして、その枠組みに当てはまらない**

という見方もやっぱりある。(まあ、もちろん。) 当てはめてしまうと、他(の宗教団体に)も当てはまるので、じゃあ、枠組みを変えるなり、新しい枠組みを作るなり、何か策を講じて、司法として真っ当な判決っていうのは、やっぱり外れられないですよ。(そうです。) そこを一生懸命、今探してるっていう見方ができるってことですか？

島田裕巳

だから、その30人の人たちがこの1年努力してやってきたものの中に法的に妥当なものが本当にあるのかどうか、今の時点でわかんないわけですよ、中身がね。解散請求の中身が分からないので、具体的に司法がどう判断するか、その材料を我々全く持ってないから判断が難しいんです。だけど、1年かけて、日本の官僚が30人でね、協議してきたことがそんなにやわなものじゃないんじゃないですか。むしろその行政ってか官僚の人たちからすると、政治家がだらしないんじゃないかっていう考え方もおそらくあると思うんですよ。だから、自民党がそういうふうに統一教会と関係があったのやら、なかったのやらで、そういうことに対して、非常にうやむやにしようとしてるわけで。そういうようなことっていうのに対して、官僚の人たちからすると、政治、政治家のことは、あんまり高く評価してない官僚が多いと思うんですが、さらに、そういう不審みたいなのが強まったっていうところもあるんじゃないですかね。

小嶋

うーん…

島田裕巳

だから自民党を、家庭連合がいろんな形で仲間にしようとしたいろんな努力があるけれど、結局、1番大切なことで、家庭連合の主張というものを自民党の議員に理解してもらってことをやってこなかったんです。ただ、イベントに来てください、祝電を打ってください、挨拶してくださいっていう、そういうことだけしかやってなくて。

小嶋

うん。

島田裕巳

(家庭連合の考え方)中身をちゃんと理解した自民党の議員で関わった人が果たしてどれだけいるのか。1人や2人はいるかもしれないけど、多くの人たちは結局のところ、ただ挨拶しただけ、祝電を送っただけ。大した関係ありませんよと、自分は関係ありませんよって形ですと逃げてきたわけですよ。だから、鈴木(エイト)さんなんかはズブズブの関係って言うけど、非常にね、僕なんかからすると、あまりにも関係が薄すぎる。

小嶋

うん。

島田裕巳

結局、その家庭連合の側としては、そういう議員さんにイベントに来てもらうことによって、自分たちのイベントの箔をあげるっていうことがあったかもしれないけど、その時に一番本来やらなければいけない自分たちの考え方を議員に理解してくれもらうことっていうのを怠ってきたんじゃないかと。

小嶋

そうかもしれないですけど、うーん、私はあんまり友好団体の方がやってることで、家庭連合としての活動は全くないので、応援してる人が投票するぐらいしかやってないので、詳しくはないですけど、そうなんですかね。人に依るんじゃないかなとは思ってますよね。素晴らしい考えだねと、自分も同参するよってことで。やっぱり、何の理解もせずに言われたから協力するっていうのは難しいと思うので、ある程度理解してて、手伝い手伝われ、相互関係あったと思うんですけど。安倍元首相の銃撃事件でマスコミから叩かれて、叩かれながらもなお、うち(家庭連合)を擁護するまでではなかったってことだと思うんですよ、私は。だから理解はしていたけど、深く理解はしていたけど、自分のそういう積み上げてきた名声やキャリアまでを投げ捨てて、うちを擁護するほどの団体ではないというか、これぐらい(の評価)だったんじゃないかなと。

島田裕巳

やっぱり、1968年に国際宗教連合が日本でできた時に、その時点ではですね、やっぱり68年っていうのは、政治運動、学生運動が頂点に世界的に達した年ですよ。それで、左翼の運動というのが日本の社会の中で強くなって、学生運動なんか特にそう。それに対して対抗する運動っていうのはなかったが故に、国際勝共連合、原理研究会っていうものを支持する政治家もいれば実業家もいると、そういう段階だったわけですよ。ところが、やっぱりその反共産主義、勝共っていう考え方が、ソ連が解体することによってなくなってしまおうと。(そうですよね。) うん、もちろん今でも共産主義の国はあるけれど、反共っていう形で運動を展開するほどの重要性っていうのを感じてる人たちはあまりいない。

小嶋

現時点で。

島田裕巳

そうですね。日本共産党っていうのも、原理研なんか対抗してたわけですけど、その日本共産党自体が、どんどんどんどん、一応、創立 101 周年まで来ましたが、力を失ってるわけですよ。もう議席もどんどん減って行って、僕は消滅するんじゃないかと思うんですけど。そうなってくると、一時の統一教会っていうのは共産党をいかに撲滅するかって運動を積極的に展開してきた。そこに関しては、やっぱり保守の人たちって

小嶋

ある程度評価が…

島田裕巳

ある程度ってか、相当。そうね、(勝共連合の共産党に対する姿勢に)共感する部分があったけど、やっぱり、社会情勢が大きく変わることによって、支持する必要っていうのがやっぱりなくなってるってのは大きいと思うんですよ。

小嶋

うん、そりゃそうだと思いますね。まあ、私もシンポジウムを行う中で、いろんな有識者の先生方お会いしますが、昔の勝共連合はすごかったっていうのは口を揃えて言ってくださるんですよ。私は生まれる前とかの話なので、まあ、(家庭連合)内部の方々から昔話よく聞きますし、**外の方々も勝共連合すごかったと、だけど今はねっていうのは、やっぱりセットで言われるので**、そうなのかなと漠然と思ってるんですけど。

島田裕巳

で、その頃はやっぱり、左翼の運動ってのはあまりにも盛り上がりすぎていたんで、なんとかそれを抑えたいっていう人たちは結構いたと思うんですけど、やっぱそういうような社会情勢の変化みたいなものの中で、勝共っていう側面が意味をあまりなさなくなってるってことがね、政治家の人たちも、この宗教、家庭連合をなんか応援しようとか、擁護しようとかっていう、そういう気にならない。

小嶋

うん。

島田裕巳

まあ、もう要するに、火の粉さえ浴びなければいいなっていう、その程度の認識で関わってるっていうことだと思うんです。だから政治家の力によって解散請求が抑えられる云々ということも議論として出てきましたけど、そんな政治家いない、今。

小嶋

うん、そうだと思います。うーん…どうしてったらいいですかね。先生から見て、やはり、今までの政教分離が強くなっていく背景とかを見ても、司法も味方するあれはないだろうと、政治もそうだろうと、今まで…

島田裕巳

国民もね、ないわけですよ。

小嶋

ない。それはないわけですよ。

島田裕巳

辞めた二世には同情しても、皆さんみたいに辞めてない二世にはあまり同情がない。

小嶋

ええ、そうですよね。うん。昔であれば、私たちを応援する価値もあったけれど、今はそこまでないという。どうしたらいいですかね…？

島田裕巳

いや、僕はもうね、あっさりしてて。はい。自主解散。合わせて関連団体もすべて解散する。これしかない。こんなことできないと思いますよ。できないと思うけど、これしかない。もう1回、最初の時点に戻ってやり直す以外ないですよ。だから、まだ信仰があるんだったら、そのやり直してというのは自分たちの信仰に基づいてやり直すってことが一番重要で。

戸丸

やり直し？やり直して、最初からそれができるイメージ湧かない。え、そんなん。そんなん、できます…？

島田裕巳

いや、僕はね、ほんとにオウム事件の時にバッシングに遭って、9年間仕事がなかった時期があるんですよ。それなんですよ。

小嶋

いやいやいや、それとは…。先生も大変ご苦労されたかもしれないですけど、それとは違

いますよ。

島田裕巳

幾分、統一教会もそこに関わっていて、なんか僕は統一教会寄りって思われた部分があつて

小嶋

失礼いたしました。

島田裕巳

迷惑被ってんですけどね（笑）

小嶋

申し訳ない…

島田裕巳

だからね、少なくとも一体どこが間違っていたのかってことは「今のこと」を考えてると、やっぱりわかんないんですよ。もう1回遡らなきゃいけないんですよ。意外と些細なことが最初におそらく問題だった。些細なこととは何かって言うと、僕は、あの珍味売りど、それから偽募金だと。募金って皆さん知らないかもしれないけど、あの募金活動を街角でやってる人たちがいて、この人たちが怪しいんですよ。聞いても何のために募金してるのかよくわからない。で、多くの人たちは、この人たちは原理研の人たちだなんていうふうに考えて。徹底してそれを追求した人はあまりいないので、完全にそうだとは言えないんだけど、当時の知ってる人たちの常識では、これは旧統一教会がやっていたことだっというのがあるんですよ。

小嶋

え、そうなんですか。

島田裕巳

そう。これは多分間違いない。そこが靈感商法とかの元になってるんですよ。

小嶋

うーん、ちょっとわかんないですけど。

島田裕巳

だからそういうことも知らないわけで、そこにやっぱり立ち返って考えないと。

小嶋

いやいやいや、立ち返る必要性はもうちょっと後で聞いてみたいですけど。でもあれですよ、解散するべきかしないべきかっていうことだけでちょっと考えてみると、**今も継続的に悪質性があれば、それは止めないといけないと(なるけれど)**。私たちが今、(先生が指摘される問題行為を)わからないみたいに、今はもうない昔の話じゃないですか。それを昔はこうだから、じゃあ解散した方がいいっていうのは、ちょっとなかなか、何も知らない世代としては納得できない部分があるんですけど。

島田裕巳

うん、それはだから一世とかの責任だよ。

小嶋

いや、ひどい。

島田裕巳

一世がやってきたことが一体何なのかっていうことがやっぱり問題で。コンプライアンス宣言した時も、僕は、その時は家庭連合になってたのかな、幹部の人が今更コンプライアンス宣言かって言った人がいたんだよね。だから、コンプライアンス宣言っていうものに対して、心からそういうことをしなきゃいけないと思ってたんじゃないで、結局は世間から言われてるんで、そういう方向に行ったという。やっぱりその時点で、**単に(コンプライアンス)宣言をするだけじゃなくて、一体自分たちがやってきたことが何だったのかってことを検証する作業っていうのを果たしてやったのかどうか**。いい方向に変わったからそれでいいっていう風にやっぱりならなくて。

小嶋

原因を追求していかなければ根絶できないっていうことですか？

島田裕巳

うん。そこをしないと、世の中の人たちはやっぱり納得しないんですよ。(ま、そうでしょうね。)で、1回悪いイメージがつくってことは、それを払拭するってのは、特に団体の場合、難しいですよ。だから、今、世の中でジャニーズのことが問題になってるけど、このジャニーズ事務所を再生するってことと、家庭連合を再生するってことは、僕は似たことだと。**1回悪いイメージがついて、それは過去のことなんだけれど、現在にも及んでる**。これをどうするかっていうのはね、ほんとに解体的な再出発をしない限り、相当難し

いんじゃないか。

小嶋

うん、じゃ、先生が最初の冒頭でおっしゃってた、統一教会ウォッチしてきたということで、昔の統一教会も、私たちの知らない時代もよくご存じだと思うんですけど、トータルで分析した結果、今回の(問題)、もちろん、2009年のコンプライアンス宣言も出し(ましたが)、**今回もまた(問題が)起きてしまったことの、根本的な原因っていうのは、なんだという結論が出たんでしょうか。**

宗教団体特有の構造

島田裕巳

宗教団体っていうのは、企業と違うんですよね。一般の企業っていうのは、勤めてる人はそこで給料をもらって活動するわけじゃないですか。そうすると、やっぱり会社の方針とかそういうのに従って行動しなきゃいけないと。ところが宗教団体っていうのは逆じゃないですか。献金ってことに見られるように、**信者の側がお金を出すわけだ。**

小嶋

はい。

島田裕巳

だから信者の方が中心なわけですよ。教団の権力っていうのは、実はそんなに本来的にはないんですよ。だってお金が出す側の方が強いわけだから。ていうことは、信者の側の責任っていうのは非常に大きいし、**どういう人が信者になるかっていうことを制限したりすることが難しい。**

小嶋

うん、そうですね、確かに。

島田裕巳

となると、**問題がそもそも起こる、起こりやすい構造**になってるわけです。

小嶋

いや、ただ、今回の旧統一教会問題の問題点に関しては、信者は被害者だと。幹部の人たちが極悪人で、信者をマインドコントロールし、心優しくて、よく世間がわからない信者の人たちを騙して巨額の献金をさせているっていう、そういう主張じゃないですか。逆ですか。その信者の人たちに力があって、いろんなことを…

島田裕巳

していいし、だから、誰が責任を取るかっていうのが、宗教団体の場合、非常に難しいんですよ。それぞれの立場っていうのが。会社なんかのようにガバナンスが効くような状態の中にあるわけじゃないから。だから前もお話したけど、家庭連合の勅使河原さんに呼ばれて話をした時にね、勅使河原さんが言ったのは、家庭連合の中に金を持っていくやつがたくさんいるって。

小嶋

たくさん？たくさんって言ってました…？たくさんいるって？

島田裕巳

怒ってましたけど。(ひどいな。)でも、そういうことが起こるわけです。

小嶋

誰だよ…(笑)

島田裕巳

いや、誰だか追求してください(笑)っていうのは、例えば、靈感商法や、今でもやっているかどうかことが問題になったりしますよね。その時に、教団の直接的に、統率下にある人が言ったとして、そういう人たちをコンプライアンスってことでさせないことはできるかもしれないけど、周辺にいる人たちっていうのは、そのノウハウを既に身につけているとなると、教団と無関係にそういう活動し続けている可能性ってのはどうしてもあるんです。それに対して、教団っていうのはコントロールすることがやっぱりできない、そういうような組織なんです。そういう宗教団体の特有な組織のあり方っていうのを、一般の人たちはまだ理解してない。そこがややこしいんですよ。会社のようなものだっていう風にどうしてもイメージしちゃう。だから、教団のコントロールっていうのはもっと効くはずだっていう風にみんな思ってるけど、構造がそもそも違う。

小嶋

いや、うーん、あまりピンとは来ないんですけど、例えば、マルチ商法とか、ねずみ講とか、こういう話に多分直結してくる話だと思うんですけど。いや、私たちの団体は、ノルマとか一般信者がお金を集めなきゃいけないっていうのは特にはないんですよ。自分がしたければするし、周りも(献金)させなければいけない何者の義務もないし。まあ、ありますよ。隣の人家が買ったと。家買わないで献金しなよって思うことはあったとしても、隣(の人)が家買おうが献金しなかりょうが、私には何の関係もない。もしその関係性があるとすれ

ば、教会長ぐらいですよ。その教会の財政が厳しい、献金を集めたい、信徒に献金をしてほしい、それぐらいであって、横々で何もねずみ講みたいに広げなきゃいけない何のノルマもないので、その管理は難しくはないと思うんですよね。ただ、教会長とか幹部とかがしっかり管理できていればいい話で、例えば勅使河原さんがなんで、(金を持っていくやつ)がたくさんいるとか言ったかは知らないんですけど、勅使河原さんが、じゃあその金を奪っていく悪い教会長がいるってもし言ったんだったら、幹部が把握してる証拠じゃないですか。それで、文句言って怒ってたんですよね。それを良くしたいっていう意思ですよ。その、幹部として。

島田裕巳

(幹部として改善)したいっていうか、もうとんでもない奴らがいるなっていう感じ。

小嶋

え、それを把握したってことは、調べたってことじゃないですか。管理しようとしている意思の表れなので、教団は組織としてそういう悪い教会長たちをしっかりと取り締まるし、コンプライアンスに、国のそういうあり方に則って、しっかりと献金の在り方を正そうとしてるっていう意思是、とても私は感じるんですけどね。それについて、どう思いますか？

高額献金について

島田裕巳

いや、だから、この前も話したけど、なんか献金感覚みたいなものが世の中と大幅にずれてるって。

小嶋

そりゃそうです。

島田裕巳

でしょ。

小嶋

それはしょうがない。

島田裕巳

だから、自分たちの生活がどうなったとしても献金をしたいと。(そうです。)で、こういう感覚っていうのを、世の中の人からすると、どうしたって理解できないわけで。その時の説明と仕方としては、何らかの形で圧力がかかっていると。

小島

圧力…

島田裕巳

うん、教団から何らかの形で圧力がかかっているが故に、3000万の本買ったり、1億円献金したり。

小島

いやいやいやいや。え。ど、どう？ちょっとちょっと、なんも喋ってない真ん中の2人がなんも。

新田

ちょっと圧倒されすぎて、あの、これ、どうしたらいいんだろうなみたい。はい。えっと、上から圧力がかかるから献金してるって。いやいや、僕の考えとしては、それないないなのは思っている。そもそも全く今、僕も信者ですけど、圧力なんてかかってないです。なんていうか、ほんとにこう、自分の生活を捧げてまでも、ほんとにこの教団が目指してる世界平和とか、それを本気でなしたいって思えるだけの情熱、熱量、それを与えてくれる教えだったり、まあ、そういうものに出会って、本気でそれなしたいっていう思いから、頑張ってるんじゃないかなっていうのは、個人的には感じてます。

小島

と言うと、マインドコントロールされてんだなって思われるんですけど、カルトって。

島田裕巳

ていうよりもね、やっぱそれ、すごい危険なことだね。結局、その信仰っていうものが消えたりするわけですね。(そうです。)途中でね、信仰を失ったりするってことがどうしても起こると。そうなってくると、多額の献金をしたって、献金した時は、これはもう世界平和のため、この家庭連合の運動が発展してくれることのためにいくらでも私はお金を出すって思うふうにしてた人が信仰を失ってしまうと、途端にそれは騙されたっていう風になるわけで。(うんうん。)これはだから人間の心理っていうものがどうしてもそうなってくる。それは宗教的にどう説明するかってのはまたいろいろあると思うんだけど、そういうようなことが事実として起こるとすると、高額献金を取るってことは、非常に危険な行為なんだよね。

小島

いや、あの、そうですね。んー、ちょっと待ってください。まあ、確かに、うちの親も、高額献金しました。はい。新田くんも話聞いたんですけど、献金してたのよね。

新田

そうですね、はい、かなり頑張ってる。

島田裕巳

いや、宗教団体に献金する人はいっぱいいますよ。だけどちょっとね、**家庭連合の場合**は、(わかります。)額がちょっと違う。

小嶋

それは認めます。仕方ない。けど、まあ、なんですかね。新田君もだし、私も恨んでた時ありましたよ。もちろん。おかしいので、額が0、1個も2個も違う金額を献金する。

島田裕巳

だって水道止められたりしたの。

小嶋

言わないで。

新田

ハハハ。

小嶋

そう、水道がひねっても出てこない水が…。それぐらい、命よりも大事、ある意味ね、熱狂的に献金してきた。それに理解できなくて、うん、いや、やめてくれよって思って喧嘩した時も、まあありますけど、それが先ほどおっしゃってた、信仰を失って恨んで被害者となるケースとならないケースが、現にあるわけじゃないですか。ここに今座ってる人たちは、来た人たち、現役信者たちは、恨みにならないっていうことなんですけど、これは、じゃあ時間が経てば、いつか気づいて恨み始める可能性があるのかなのかっていう話をするとないと思うんですよね。現役は現役でずっと現役だと思います。うん。でも…

島田裕巳

でも、そういう人たちがいたっていうことは…

小嶋

それは私も考えたんですけど、**献金した時の動機じゃないですかね**。結局は。もうこの親とかも多分思わないよね。なんかまたひっくり返って、献金したことを後悔して信仰なくなるっていうのを想像できる？親が。

新田

いや、それはない。ないですよ。感謝して捧げ切ってるというか。

小嶋

もう絶対変わらないですよ、それは。誰かに言われて、一時的に決意したものとかじゃないんですよ。宗教のこの教えに出会っては、言ってしまえば、神様に出会ったり、神体験みたいなのしたりとか、人生の、なんていうか、すごく大事なものをこう得たので、それが違うものになるっていう、記憶の変換って。だから、なんていうか、**人に言われた客観的事実を、違ういろんな方面から見て間違ってた、あったとか、色々と観点変わってから、考えて変わると思うんですけど、親たちが経験したものは、観念、観点、なんていうか、考え方ではなく、実体験なんですよ**。はい、事実なんですよ。はい、この事実は変わらないわけですよ。何が起きても、誰からなんと言われようと、事実、体験した人生の中で勝ち取ったものなので、これは変わらなくて、多分、教会を離れることは一生ない、死ぬまでないと思うんですよ。そういう人たちが、高額に献金してきたとはいえ、それは分からないことは恨むし、分かれば素晴らしいねってなるわけで。で、今そういう被害を訴えている人たちは、多分そういう、なんかこの珍味とか、靈感商法とかで、人に言われてやった人たちだと思うんですよ。それさえなくせば、本人が熱烈な決意や、いろんな思いで、自分が出したいって思っていないのに、教会の財政とか献金の、そういう、何かしらの発展を願って、人に強要したのであれば、それはその時はいいと思っても、時間が経てば辞めればよかったでそりゃなるので、それさえしっかり禁止すれば、何も宗教団体が統制できないとか、危険だっていうことではないと思うんですよ。人に強要すること自体が危険なんだと思うんですけど。

島田裕巳

それ、ずっぼりとハマってる人はね。

小嶋

いや、ハマってるんじゃないんですよ。

島田裕巳

要するに、まあ、言い方を変えれば、確固とした信仰を持ってればいいわけですよ。ところが難しいのは、1つは家族の問題で。

小島

はい。

島田裕巳

家族が全員同じ考え方を取るとは限らないわけで、そこに子供が例えば恨むとかっていう現象が必ず起こってくる。起こりますね。それから、やっぱりその信仰っていうものを、どれだけ深く入ってるかどうかっていうことによって、やっぱり変わってくるわけですよ。だから、その辞めちゃうような人達ってというのは、そういうものを十分な、例えば研修とかに行っていないとかね、そういうような人たちってというのは、そういう風にまた辞めるって方向になびいていくっていう。そういうこともあって、宗教団体だとどうしてもそういうことが生まれてくる。で、信者の側の熱意としては、1人でも多くの人を自分たちの仲間になりたいと。

小島

うんうん。

島田裕巳

で、仲間になってくれさえすれば、本当のことが分かるんだから、今は疑問に思っていたとしても大丈夫ですよとか、そういうような形で勧誘するわけです。これは家庭連合に限らず、どの宗教でもそういうことをやる。ところが、そういう人たちが本当の信仰っていうものをその教団に対して持つとは限らないわけで、揺れたり、やめたりってことは、どうしても起こるんですよ。で、そこまでのコントロールってというのは、これ教団にはできないんだよね。

小島

うん、私の母は熱狂的だったので、例えば別の兄弟は、まあ、今でも恨んでたりもしますよ。確かにそういう被害とかは防げないのかもしれない、私の家庭だけ見れば。ただ、ちょっと、この3人で話し合った時に、意外だったケース(戸丸さん)がここにいる、ちょっと聞いてみてください。

戸丸

あの、(親の献金を)恨んでないって。

小島

うん、そうそうそう。うまくね、うまくやってっただけ？

戸丸

まあ、献金は確かにたくさんね。我が家庭も壺もちゃんとあって。まあ、でも私は親がたくさん献金してたから自分も生活苦労したなみたいな、そういうことはあんまり感じたことはなくて、普通に私がやりたいと言ったことは、習い事なり、部活なりさせてくれたし、高校生の時、白血病だったんですけど、その時もほんとに全然しっかり、治療を受けさせてくれたり、まあ高校生の間は髪の毛ないですからカツラかぶってね。でも、それも人工のやつとかだと、カツラってすぐ目立つから、ちょっと高めのね、人工じゃなくて、人毛のね、そういうやつをちゃんと献金もしててお金ないはずだったけど、そういう風にして、子供にける分は、もう本当にしっかりかけてくれたなって。こういう事件が起きてから献金の話も改めて親に聞くようになったので、後になってから、大変だったのに子供には苦労させないようにしてきてくれたんだなって思っ。そういうので、やっぱ、家にお金がなくても、子供には苦労させないという親心、そこらへんの違いはあるのかな…

小鷲

バランスがいいんですよ。だって、事件が起きるまで気づかなかったんですよ。たくさん壺もあって、献金たくさんしてきて

戸丸

インテリアかなって思ってたんです(笑)綺麗だなって。

小鷲

事件が起きて、親と話してうちも結構してたんだみたいな。そういうケースだったたくさんあって。会場来てる二世でいますか？なんか献金がやばかったっていう人いますか。うちやばかった。あげづらいよね…

戸丸

ちょっとあげてみて。

小鷲

え、献金やばくなかった。みたいな、知らなかったみたいな。あ、いる。ほらほらほらほら。司会も。司会もしてなかった。(壺とか置いてなかった。)

新田

壺ないところもあるんですね。

小嶋

え、そういう感じで、みんながみんな、こんな感じの(献金たくさんしていたわけ)じゃなくて。

島田裕巳

あの、まあ、だから続いているわけでしょ。

小嶋

えー、バランスにとって、子供には苦勞はさせないようにしながら、実は結構してたっていうケースもたくさんあるので。あとは、今、献金確認書ってできて、10万以上献金する場合、確認しないといけなくなったりとか、親族に許可取らないと献金できないようになってるので、そこはもう、やっぱり、逆に献金しちゃダメなんですかみたいな。電話するか言ってたぐらいなので、献金したくてもできないみたいな変な現象になって。なので全然、高額献金に関しては解決済みと見てるんですけど。

島田裕巳

という風には、世間が理解してないってこと。

小嶋

そういうことですね。なので、結構、その被害を訴える人たちは、やっぱ40代、50代とか、少し昔のコンプライアンス以前の激しかった時代に、やっぱり恨みを持っている人が多いので、私たち20代とかは、まあやってきたけど、バランスよくやってもらえたっていう人たちがやっぱり多いですね。そう思ってるんですけどね。ダメですかね…？

島田裕巳

だから難しいですね。そういうことで別に問題ないって思う人たちもいるんだけど、一方では、それが問題で、自分の生活っていうか、人生をダメにした根本的な原因であるっていう人もいます。

小嶋

うん。

島田裕巳

こういうものが生じてきてしまったってこと自体は、もうどうしようもない。消しようがない。

小嶋

今後、そういう人が生じないように努力を重ねていくしかないんだと思うんですけど。それにしても解散っていうのはやっぱり、そこはちょっと…。確かに島田先生、このディスカッション来てくださって時に、擁護しない立場でお願いしますって確かに言ったんですけど、解散した方がいいっていう、ちょっとこれは衝撃的で、今戸惑ってるんですけど、解散しなくていいっていう結論でこのシンポジウムを終わるわけには決まっていかないんですけど…

島田裕巳

いや、だからちょっとね、弁護士さんなんか、中山さんなんかもそうだけど、ちょっとやっぱり対抗できんのかなっていう気はしますね。

小嶋

何とですか？

島田裕巳

多分、国が積み上げてきた証拠っていうものを、論破するだけのものを、今まで主張していたような、例えば継続性がないとかね、悪質性がないっていう議論だけでは論破できないんじゃないかなと。

小嶋

そうですね。最初の方の話を聞いて、絶望的ですけど、今、(新田さんに振る)

新田

そうですね、かなり顔がこわばり始めましたけれども、いや、どうも、結構、解散命令の請求が出るっていうことが、なんか自分たちは犯罪者だと言われてるような感じをすごく感じて、それがほんとに苦しいし、辛いっていうのはあって…。うん、はい、ちょっと、すいません、言葉が。

小嶋

どうしたらいいんですかね。解決策なんてない。先ほどおっしゃってたことが本当であれば、もう解散請求へまっしぐらで、解散ありきで動いてるっていうことが本当であれば。

島田裕巳

だから、ここで解散請求までは確実に行くでしょう。今の情勢だと。それを司法がどう、地裁・高裁・最高裁で判断するか、確かにまだ今わからないですよ。で、司法はやっぱり

一応独立してるわけだから、その判断っていうのは自分たちで独自にやるわけですね。だから、これじゃ不十分だっていうことが出る可能性っていうのも十分ある。じゃあ、もし解散がっていう形にならなかったとしたらどうなるのかと、世間はそこで納得するのかっていうと、これは結構また難しいんですよ。解散請求がなされたにもかかわらず、それがそこ(裁判所)で認められなかったという事態で、じゃあ、これだったら、まあ今の家庭連合っていうのは問題のない組織であるっていうふうに世間が考えるかっていうと、残念ながらそういうことにはならない。

小寫

うん、まあそうなんですけど、そういう状況って、元々そうだったというか、今、国家的な迫害とかって言われてますけど、そんなことなく、多分私が生まれた時からそうだった。この国、国民からの視線が冷たいっていうのは、元々そうだったので。やっぱり、親からは、宗教をもって信じてること、統一教会っていう名前は出しちゃいけないと。出したらいじめられると。周りにもいじめられた人とか、教師から殴られたとかもいましたし。これはもう、隠すべきものっていうのは、1年前に始まった話じゃないので、解散しないで国民から受け入れられない。これはもうずっとそうだった。ずっとそうだったけど、でも、理解してもらうために、まずは周りの1人、2人から理解してもらおうと、これは今も昔も変わらず行っていくっていうことで、変わらないんですけど、ただ世の中っていうのは、意外と関心あるようでもなかったり、そうでないようであったりは、人に依るので。まあ、面と向かって話して、しっかり熱意を伝えれば、分かってもらえる側面もあるので、メディアを通して全国に発信っていうのは絶対に無理。でも、周りの人からやって、その周りの人が、また周りの人にやって、こうやって伝播してくのが、宗教なので、そこは、もう割り切って、亀のような歩みをしようと、私は思ってるんですけど。

一方で、政府からのお墨付きが出ると、この教団はたくさん調べた結果、解散に値する団体だとレッテルを貼られる。この事実は納得できないんですよ。どうしても勘違いされて、批判されるってことは、私たちの伝える力が不足してたっていう面もありますし、昔ちょっとやりすぎたっていう部分もあるので、反省してコツコツやっていくしかないと、これはもう、そういう運命なので受け入れてこうと。ただ、そういう先ほど言った、実際、じゃあ本当に私たちの教団の奥の奥まで調べたわけでもなく、結論ありきで、今潰しといた方がいいと、解散請求出しといた方がいい、出そう。こんな話は現役は受け入れられないですよ。やっぱりそこだけはやめてくれと。ほんとに私たちがどうしようもないカルトで、もう高額献金もしまくって、被害をたくさん出す、そしたらもう涙を飲んで諦めますけど、これは違いうだろうってやっぱり思うんですよ。先生の言う解決策が解散だ、これはどうなんだろうっていうのは思うんですけど、なんか(新田さん)喋りたそう。ちょっと替わります。

新田

そうですね。結構二世たちは、さっきのアンケートにもありましたけれども、今メディアで放送されてる内容と今の教会の実際の姿というか、そのギャップに相当疑問というか納得いかないものを率直には感じています。なので、ほんとにちゃんと教会の今の姿っていうのもちゃんと見ていただきたい。それはもちろん、政府の方々、ほんとに質問権7回もしながらそういうのを慎重に調査していったと思うんですけども、実際メディアを通して見るのって、家庭連合の悪いところばかりのニュースなので、一般の国民からしてみたら、結構やばい団体だなと。それはなくなったらいいんじゃないか、そういう発想にしかない。今、もう世論として、メディアをがそういう論調を作り出してるのを感じていて、公正に判断できてないんじゃないかなっていうのはすごく思ってるところであります。なので、もう国民が納得できないって話もあったと思うんですけど、もっとちゃんと今の家庭連合がどういう実態なのかっていうのを知ってもらえたらっていう思いがずっとあるので、広報を頑張らないといけないってことで。

小嶋

そうね。はい。うん。

戸丸

私もこのまま請求出て、それこそ政府のお墨付きも、犯罪集団みたいなイメージが世間に、もう当たり前としてなっちゃった場合に、私の二世の友達とかも、もう今年出産してお母さんなってる子も結構いるんですけど、そういう何の罪もない赤ちゃんたちの顔がやっぱ思い浮かぶんですよね。そういう子たちが育っていくこの日本の社会で、犯罪集団(と世間からは見られる宗教)の信仰を持つ家庭で育つっていう。この日本の社会の未来も、この赤ちゃんたちの顔をちょっと想像したら、どうしたらいいんだろうって、そういう切実な、ちょっと深刻な気持ちになりますね、やっぱり。

島田裕巳

だから、世間のその見方っていうものが、果たして変わり得るのかって考えた時に、これだけそういう風な方向で来ちゃってるから、これ、やっぱり変えていくのは相当難しいですよ。実際に世間に対して、そういうような行為として、高額献金とか靈感商法はやらなくなってきているとしてもね、逆に世間の目っていうのは、この長い、何十年かの歴史の中で、むしろ悪化してるんだよね、家庭連合に対する見方っていうのは。(悪化してる?)で、悪化してるっていうのは、やっぱりその家庭連合がやってる行動、行為というのが一般の人たちには理解しがたい。それが、さっきの祝福なんかの問題っていうのもやっぱりそうで、なんでそういうことを皆さん方が受け入れてやってるのか、やっぱおかし

いんじゃないのっていう見方がかえって強まってるんじゃないですかね。

小鳥

強まってるんですか。(うん。)いや、え、事件がなかったとしてもですか？

島田裕巳

ま、事件がなかったら話題にはならなかったとは思うんだけど。ただ、今の社会のさっき言った流れからすると、宗教に対する目っていうのが厳しくなってるから。(まあ、そうですよね。)で、いつか、どういう形か分からないけど、やっぱ同じような形で問題視されるってことはあったと思うんですよね。世間の考え方とやっぱあまりにもずれて…。それはもちろん世間が正しいわけじゃないですよ。世間が正しいわけじゃないけど、多くの人たちの考え方と、やっぱり家庭連合の結婚っていうものに対する考え方が違いすぎる。

祝福結婚について

小鳥

うん。高額献金に関しては、確かに高額に献金を捧げてきた人たちに関して、いや、車買ったり家買ったりの方がいいでしょと、なんでそんな悪口言われてる教会に高額に献金できるのか理解できないっていうのは、確かに私もなんとなくわかるんですよね。ただ、宗教的な信念でやってるっていうのを見てきたので、これを理解してもらおうっていうのは確かに厳しいだろうっていうのはわかるとして、祝福結婚も分からないのですか…？

島田裕巳

え、なんでって。

小鳥

え、でもお見合いと同じって考えたらそんなにひどくは…

島田裕巳

だから、その、お見合いっていうこと自体が、この戦後の日本社会でお見合い結婚が多かったのが戦後すぐなの。それがどんどん減ってきて、代わりに一応恋愛結婚とされている見合い以外の結婚がぐっと増えて。で、見合いっていうものは文化的にあまり社会の中でなくなってきてるっていうことが、そういう点に関して言うと、結構響いてんだよね。

小鳥

うん。

島田裕巳

なんで自由じゃないのっていう。

戸丸

まあ、自由ですけどね。お見合いも。自分で決められないっていう感じがするってことですか。そうかな？お見合いについて…。でも、やっぱり恋愛結婚がなんか当たり前になってる社会だからということですかね。じゃ、当たり前じゃないことをしてたらカルトってことですか？

島田裕巳

いや、そういうことではない

戸丸

ね。だから、なんかそこら辺…

島田裕巳

カルト的に思われるってことはあります。

戸丸

うん。んんん。

小鷲

まあ、それは否めない。でも、祝福結婚はすごいいいって思ってる人はたくさんいるんですよ。つまらないから教会は通わないけど、結婚相手は祝福。そういう人ほんとに結構いて。それ絶対に離婚しないし、不倫しないし。よく私 LINE 来るんですよ。友達から。ちょっと彼氏が浮気してるかもしれないからチェックしてみてとか、ちょっと旦那がどうだからちょっとどうのこうのとか。よくそんなのには巻き込まれることあるんですけど、絶対にないですよ。家庭連合は。絶対に私の旦那は浮気しないし。もうね。だよ。みんないいことばっかじゃないですか。その宗教が持つ…

島田裕巳

逆に言うと、また不倫っていうのが流行ってるとこもあって、(世の中がですよ。)そんなこともできないのかって、縛られたっていうのはどうなのみたいな、そういう考えの人もいるわけで。

小島

そうですね。でも宗教の役割じゃないですか。そういうやっぱり、なんていうか、自堕落に、自分の性を管理できない、それはもう中絶の問題だったりとか、色々と社会問題になっている。ちょっと性とは関係ないですけど、少子化の問題だったり、家族の離婚とか虐待とか家族の分裂だったり、そういうのやっぱり、どうやって修正していくかって言ったら、政治でも厳しいし、制度を施すのも厳しい。となると、道徳心だったりとか、そういう自分の心の中にある良心基準を高めたりとか、これが宗教の役割じゃないですか。その役割を果たしていこうと思って、やっている私たちっていうのはすごく健全で、日本にとっても有益だと思うんですけど、それダメですか？なんていうか、世の中の風潮と全く違って噛み合わない。確かにその通りです。でも、その世の中の風潮が問題。それ、うちが言うのはちょっと気が引けますけど、問題じゃないですか。やっぱり少子化にしたって、離婚にしたって、不倫にしたって、家庭内虐待にしたって、これをどう解決していくかって言ったら、やっぱり宗教性だと思うんですよ。

私が韓国に留学してたので、韓国であったサミットって2020年にあったんですけど、そこにも日本から何人も有識者の方、学術の人とか政治の方とかも来てましたけど、なんで来たんですかとかって、学生スタッフやってて聞くと、(家庭連合の関連団体と)知ってて来たんですか。みたいな、聞くと、知ってて、あ、うんって。知ってて来たんです。大丈夫ですかと聞くと、自分は、今、少子化問題に取り組む担当なので、色々と調べてたら、家庭連合が出生率が高くて、離婚率が低いと。これを研究対象として来たんだっていう方もいたぐらい。そういう宗教なら、それはうちだけじゃないですよ。キリスト教とか、色々な宗教の価値観で、離婚はしないと、家族を大事にするとか、なんて言うんでしょうね、普通じゃ考えないようなことを考えるし、宗教っていうのはとっても大事なことだと、日本に欠かせないもんだと思ってるんですけど、宗教学者の観点からだとどうお考えですか。

島田裕巳

宗教っていうのは、そういうような倫理っていうものを説くものだから、その考え方自体が間違ってるとか、そういうことはもちろんないし、逆に言うとその部分っていうのは、1990年代に、最初に大きく統一教会が取り上げられた時代とは少し逆に、あまり関心が向けられてないかもしれない。だからあの頃問題になったのは、靈感商法もあるけど、むしろ合同結婚式と呼ばれてる祝福っていうことが、大きな、特に、教祖が勝手に決めるみたいな、そういうところが大きく問題になって、それでクローズアップされて。だけど、今回に関して言うと、やっぱり祝福のことっていうのは、そんなにみんなが強く関心を持ってないですよ。むしろ、高額献金とそれから政治と宗教の(関係性)、こっちの方がやっぱりみんな中心で。そっちで、やっぱり批判されてんじゃないですか。

小鷲

うん、そうですね。

島田裕巳

あんまりないでしょ。そっちの面を批判っていうことで言うと。

小鷲

そうですね。なんかまあ、やっぱり勝手に選ばれてたのは…。親世代はあの勝手についていうか、ちょっと言葉あれですけど、あの文先生が決めた人と結婚するっていう。確かに理解しがたい面あったかもしれないですけど、今は親がおすすめしてきて、それに断ることもできるし、いいと思えばそのままやるし。私も3回目、3人目紹介されて、2人はもう断ったり断られたりしてるので、ほんとに一般のお見合いと一緒に。1つ違うのは、やっぱり神様が選んだ人っていう観点で受けるので、そういう視点観点は全く違いますけど、形式だけ見れば、まあほとんど一緒だから、批判されうる何物もないはずなんですけど、まあ恋愛禁止っていうのとか。

島田裕巳

うん、ああ、そっちな。

小鷲

それで苦労してきたっていう被害を訴える人もいるので。

島田裕巳

やっぱりそういうものが無下に禁止されるってことに対する、社会の側の反発みたいなものってあるよね。

小鷲

うん、そうかもしれないですね。

戸丸

まあ、恋愛禁止という教義があるわけではないもんね。別に、恋愛禁止というよりかは、将来の1人の人のために、異性を思う心は大事にしておきましょうっていう感じなので、まあ、それも親心って、親の伝え方。うん、そこらへんなのかなとは、ちょっと聞いてて思いましたけど。うん。

島田裕巳

だから結婚のことで問題になるのは、韓国に嫁いだ人たちのことっていうのが、大きく取り上げられてる部分ではありますよね。今は確かにそういう部分はないのかもしれないけど、やっぱり全体的に問われてるのは過去。今まで何をやってきたかってことが、混同されてる部分は、確かに皆さん方からすりゃ、もうそんなことは今はないんですよ。大きく変わりますよって言われても、**現にそういうことをやってきた過去をどうするかっていう。過去って、結構難しいんだよね。**

戸丸

うん。え、解散したら、その過去がなかったことになるわけでもないじゃない。もちろん。だから先生が解散させて、じゃあ最初からやればどうにかなるっていうのも、そうなのかな。みたいな、ちょっとね、なんかもうちょっとなんかないですか。

批判される原因の分析が必要

小寫

いや、先生にその回答を迫るのは違うんですけど。でも、いや、確かにおっしゃる通りだと思います。分析がやっぱ必要ですよ。こうなってしまった理由の分析と、分析結果と、そして表明すること。そうしないと世の中の人はず整理できない。内部ですら整理できてないのは現状です。確かに。

島田裕巳

だから、例えば今回出た本で、櫻井さんの「統一教会」っていう新書があって。(あれどう思いました?)いや、僕はね。まあ、非常に精緻な分析、詳しい分析だと思うけど、現実とはやっぱり僕はずれてるような気がした。あまりにも理論的に統一教会を捉えすぎていて、実情の皆さんのお話とか、勅使河原さんの言ったこととか、そういう要素っていうのが、そこにはないんだよね。だから、統一教会を批判してる人たちっていうのも、そういう風に統一教会っていうものをある一面で捉えてるっていう感じがして。で、確かにそれだとなんか府に落ちないんですよ。確かに。教団って人間的なものだから、そんなにこう理論でみんなが、一人一人が動いてるわけじゃなくって、それぞれの人たちの感情とか、それまでの人生経験とか、そういうものが反映されていて、みんな一律に動くわけじゃない。だから、家庭連合って言ったときに信じ、それぞれの人たちは違う考えを持ち、違う行動の仕方をするわけで、それをある1つの枠でだけで捉えるとなると、ちょっとこれは無理なんじゃないかなってのは、僕はその本を読んだときには思いました。

小寫

うーん、なるほど。いや、そうですね。やっぱり現役として、しかも二世として、昔のこ

とを知らない立場として、この一連の事件などを眺めた時に、アンケートにもありましたけども噛み合っていないと。もう世間の主張、全国弁連だったり、反対派の人たちも含めた、**世間の主張と、家庭連合側が言ってる主張が噛み合っていないって感じる**のは、確かに多くの二世が感じていることで、これはどっちが悪いというよりも、あちら側(反対する人たち)の言ってることは、多分こっち(家庭連合)の信仰心とかそういうのは、一旦、おざなりになってますし、表面的な部分なので、違うっていう主張するんだと思うんですよね。で、こちらの主張も、私たちの今一生懸命話した内容も、どれだけ理解してもらえるのかって確かに疑問で、そんなぶっ飛んだ思想は違うだろうとか、まあ、色々思うことはあるんだろうなと。**本当の解決っていうのは、まず分析するにあたって、折り合いをつける**というか、探していけないといけませんよね。私たちが世間や批判してる声にもしっかり耳を傾けながら、**材料の1つとして、分析材料として受け入れるべきだし、こちら(家庭連合)の実際やってきたことを外は知らないの、中だからこそ、多分、本当のことを知ってるので**。そうなってくと、それが可能だと思いますか。そもそも、それ自体が。

島田裕巳

いや、まあ、絶望的に不可能なんだけど、だけれども。

小嶋

もうそんな気がしますわ

島田裕巳

個人としては、そういう努力っていうものをやり続ける以外にないんじゃない。で、分析ってことは非常に大事なことで。だから、その、**こちら側の(家庭連合の)主張っていうのを展開する前に、ほんとにその原因、なぜこれだけ責められなきゃいけないのかっていう原因を掴まないとダメ**なんじゃないですか。

小嶋

あの、ちょっとお時間なんですけど、最後に聞きたいのは、今までこの歴史を通した長年の宗教迫害ってあったじゃないですか。あれとも(今の家庭連合の状況とを)重ねて自己肯定するケースも、やっぱりうち(家庭連合)ではあるんですけど、"悪かったから"迫害されてるっていう観点と、"宗教だから"迫害されてる、分かってもらえないから迫害されやすいっていう観点、2つあると思うんです。今までの宗教迫害っていうのは、様々な迫害を経て、国際人権規約とか色々できたと思うんですけど、人間が一生懸命考えて、信教の自由を守ろうとしてきた歴史が今まであって、ただそれは、悪かったから迫害されたっていう捉え方ではなくて、迫害されてきたものから学んできたものもたくさんあると思うんですよ。現役の今まで頑張ってきたお父さんお母さん方は悪かったから迫害されてるって思

ってないです。そうですよ。そのアンケート見ても、**宗教だから迫害されてる、日本は宗教に対して無知だから迫害してると(意見が多くある。)**そういった要素は少しでもあると思いますか？

島田裕巳

いや、もちろんあると思いますよ。あるけれど、それだけじゃやっぱり不十分なんで。やっぱり、なんでこうなったかっていうところには、家庭連合の側の信仰ってのもあるけど、一般の国民の信仰ってのもあるから。じゃあ、みんなが信仰がないのかっていうと、そういうわけじゃない。だから、信仰を持ってる人たちってというのが、やっぱり、まあ、みんな信仰二世なんです。世界中の人たちってのは、ほぼ信仰二世。途中で新しい宗教に改宗したって人以外は信仰二世。で、イスラム教徒の家に生まれたからイスラム教徒になるんで、キリスト教徒の家に生まれたからキリスト教徒になるんで、基本的にはみんな宗教二世。日本人の場合っていうのも、やっぱり神社とかお寺に普通に行くっていう信仰を子供の頃から植え付けられて、それが当たり前って思ってる。それが当たり前でカルトじゃないっていうのは、多数派だから。社会の中で多数派を占めているんで、そういうのはとこさ信仰とは言われない。その中に特異な別の信仰を持ち込むとなると、どうしてもその社会の全体の信仰とぶつからざるを得ない。だから、そこは宗教運動っていうものがどうやってそれを展開していくかっていう時の1番カギ。あくまで自分たちの信仰で貫いていくのか、社会の考え方っていうのを受け入れてやっていくのか。多くの宗教は、社会の考え方を受け入れてやってきて、家庭連合だってやっぱりコンプライアンス宣言って出てきたってことは、社会の考え方を受け入れて変わってきてるわけです。

小鷲

うん、そうだと思います。

島田裕巳

だから、信仰だけで貫いてるっていうわけにはいかない。でも、世の中にはおそらく、さっき言ったように、なんだ今更コンプライアンス宣言って思ってる人たちもやっぱりいる。何が悪いんだっていう人たちもおそらくいるわ。まあそうかもしれない。そう、自分たちがやってきたことが問題だって思っていない人たちはいるわけですよ。

小鷲

うん、それはいると。(いても不思議じゃない。)いや、誇りに思ってる人が多い。

島田裕巳

だけど、社会がそういうものを結局許さないで変えてきた。変わらざるを得ないっていう

歴史というものをずっとたどってきてる。

小嶋

なるほど。

島田裕巳

だけど、そこに安倍首相が殺される。これは、だから日本の国のトップが殺されたことに對して、もちろん容疑者が問題なんだけど、でもその背後にそういうことがあったとしたらね、これに對して、じゃあどうするのかって、国としてどうするのかっていう、どうしてもそういう方向で物事を国の方は考えていかざるを得ないっていうところはあったと思う。

感想と今後

小嶋

うーん、いやー、はい。ありがとうございます。もうお時間なんですけど、じゃあ、最後に一言ずつ、感想、言いたいこと、今後のこと、先生がアドバイスくださった内容を踏まえて、家庭連合どうあるべきか、どうしていくのか。

戸丸

でも、確かに、原因や色々そういう分析、冷静に現実を見て、ほんとに私は解散そんなのしたくない。それがもう悪かったら、なくして最初からやれば良くなるかって、そうなのかなっていうのもちょっと思いながら先生の話は聞いてましたけど、でもやっぱり冷静に現実を見つめて、分析するっていうか、ちょっと我が教会苦手なのかなっていうのは、確かに思うので。ほんとに、最初先生が、わーってお話されたこの分析力はすごいな、さすが学者の先生だなんて思いながら聞いてたんですけど、やっぱりそこから学びながら、より良くなっていくためにどうしたらいいのかなっていうのはもっと考えたいし、自分たちのためにも良い教会、人のためにも、国・地域のためにも良い教会になるために、今、若い人たちもいるので、みんなで頑張りたいなと思いました。

新田

はい、先生のお話を聞きながら、過去にしっかりと向き合うっていう観点、やっぱり結構、今変わってきてるのに、なんでそんな過去のことで言われなといけないのかって思いが、結構個人的にはあったんですけど、やっぱり過去の問題に對してしっかりと分析して、しっかりと答えを出してこれからの未来に向かっていく、そのステップが、もちろん0だったとは言わないんですけど、もっともっと必要なんだなってのを感じたのと、あとはほんとに、この社会に適合するっていう観点がもっともっと必要なんだなっていうの

を、すごく思いましたので、しっかりと今の世の中の声に向き合いつつも、でも、自分自身がこういう中であっても、なぜ、家庭連合の信仰を持ち続けてるかと言ったときに、ほんとに家庭連合の教義の内容にほんとに感動したんですよね。宗教ってよく自分が幸せになりたいからとか、救われるためにやるっていうイメージが強いと思うんですけど、個人的に昔は宗教ほんとにいらなと思ってた人で、自分には必要ないってずっと思ってた人だったんですけど、自分が幸せになりたいからという以上に、ほんとに人や国や世界のためについていう教えが本当に素晴らしいなと思っていて。その教えを実践してきたつもりであつたけど、もっともっと世界の平和に貢献するとか、人や社会、また日本の国においても貢献していくことができる、家庭連合にもっとなっていきたい、そういう家庭連合になれるように自分も努力していきたいなっていうことは非常に思っております。はい。

小嶋

とっても貴重なお時間を先生くださったなど、今、思ってます。やっぱり主催者側として、シンポジウムを組み立てていく時に出てくれませんか？っていう風に先生方にお話しするんですけどいないんですよね。あの、うち（家庭連合）の課題点を指摘してくれる方が。バカに塗る薬もないみたいな言葉あると思うんですけど、まあそう言わないですけど、そう思われてるなって思う時もあるほどに、こう今の状況で、少しでもうち（家庭連合信者）と関われば、色々こうね、言われる言われる。そういう情勢の中、もう自民党もそうでしたけど、ほっとけばいいというか、関わらない方がいいので、今、改めてこうやって出てくださって、それで単に誰かの話を鵜呑みにして批判するのではなく、宗教の学者としてしっかりと分析したうえで、今の家庭連合が置かれてる状況とか、家庭連合がどうしていかなければいけないのかっていうのを真摯に話してくださる方っていないんですよ、どこにも。だからどれだけある意味、擁護しない立場ってことで、一線を置いて出てもらうっていうことで、こんな褒めちゃいけないのかもしれないんですけど、どれだけうち（家庭連合信者）のことを思ってくれてるのかっていうか、うちのこと考えてくれてなかったら、厳しい言葉も言えないで、適当に優しい言葉投げかけて、内々で傷を舐め合いながらやる方が楽じゃないですか。なのにそうではなく、しっかりアドバイスして下さったっていうことにすごく感謝してますし、こうやって長い時間お話聞けたので、私たちも、そういった内容をしっかりと受け止めて、今後どうあるべきか、変えていくべきところは変えて、伝統としてやっぱり誇りに思っているものもあるので、お父さんお母さん方が守り抜いてくれたそういう誇り、誇りとか教会のいいところ、そこはしっかり受け継ぎながら、それでも変えなきゃいけないところっていうのは、簡単に変えていくと伝統にならないので、それこそ研究し、一人一人がしっかり考えて、どうあるべきなのか、どういう伝統を残し、どう改革していくのかをしっかりと考えながら、解散ではなく存続していく方向で祈りながら頑張っていきたいなと切実に思いました。最後に一言だけいただいて終わろうと思います。

島田裕巳

これから解散請求ってことがなった時に、裁判では信教の自由っていうところでね、主張されると思うんだけど、信教の自由って世俗の法律で決まってることであって、宗教の考え方ややっぱりずれてんだよ。で、ほんとに信教の自由があるかっていうと、こういうのは信教の自由って戦って勝ち取っていかないと、こんなの得ることなんかできないんですよ。だから、もしそういう事態になった時に、宗教の論理としてそういうものにどう対抗していくかってことを考えた方が、信教の自由で戦うよりも僕は有益で、それはあなたたちが、二世の人たちがこういう機会を通して成長していくことによってしか事態は変わらないんじゃない。だから、こういう事態ってのは過酷な事態だけれど、過酷であればあるほど、それを乗り越えていくことに価値があるんで、そういうような観点から望んでいてほしいなど。

小嶋

ありがとうございます。それでは時間なので、ディスカッション終わらせていただきたいと思います。ほんとに先生ありがとうございました。

司会

はい。過去に向き合わなければならぬということで、厳しい意見であると思うんですけども、非常に重要な内容だったと思います。改めまして、出演してくださったパネリストの皆様に大きな拍手をお願いします。